

## 1. 登山記録

91年にウルタル2峰に行ったが登頂出来なかったイギリスの著名な登山家ヴィクター・ソーンダース氏の言葉である。彼はスパンティックの北面の標高差2,000m余に及ぶ柱状岩壁、ゴールデンピラーの登攀で有名であるが、その彼をして頂上に達するための方法が見つからないと言わしめた山がウルタル2峰である。このつい数ヵ月前まで許可のとれる『世界一高い未踏峰』だった山は、パキスタンの北部山岳地帯をインダス川、フンザ川沿いにカラコルムハイウェイで遡ると、シルクロードの桃源郷として知られるかつての王国フンザの中心地、カリマバードのすぐ裏にある。標高2,300mのフンザ川から一気に7,388mへと標高差にして5,000m、天空に向かってそびえ立つ雪と氷で彩られた岩山である。フンザの観光案内パンフレットなどには必ずと言ってよいほどバルティット古城の背後に写っているのが、写真を目にしたことのある人も多いと思う。アプローチの長い、つまり地理的に遠い山でもなく、少なくとも1986年以降は許可取得が困難だったわけでもないこの山が、10年もの間未踏だったのはひとえにこの山のもつ登山の本質的な困難さによる。岩壁と氷壁そして懸垂氷河で四方を固め、下からの遠望では思いもよらないような複雑な尾根と谷を擁し、日中は落石と雪崩の音があちこちの壁で轟いている。その上ディラン等と同様、フンザ川が近いためか上昇気流が発生しやすく、すぐ下の村は晴れていても5,500m付近から上は雲の中、つまり雪という日が多い。狭義の登攀技術的な困難さのみならず、危険をいかに回避するかという総合的な判断力とそれを実行する確かな力が必要とされる。

私はこの厄介な山に幸か不幸か86年以来4回行き、今回やっと頂上を踏むまで3つのルートから登頂を目指しており、各面のルートの概要を見てきている。そこでウルタル各面のルートについて経験とともに簡単に述べ、最後にそれらの登山の結果としての96年の登攀について触れたいと思う。

## 2. 各面のルート

### (1) 各ルートと登山隊

過去の登山隊の取ったルートを以下に示す。偵察に関しては私の参加したものにとどめる。

(◎印=高橋参加)

- |       |                |                      |             |
|-------|----------------|----------------------|-------------|
| 1985年 | ポーランド隊 (ポバ合同?) | 南稜                   | 5,700mまで?   |
| 1986年 | 神渡湖衆 (日パ合同)    | ◎北面 (グルキン氷河)         | 4,200mまで    |
|       |                | 南稜へ転進 (南稜左稜)         | 5,400mまで    |
| 1990年 | ウータンクラブ        | 南西稜 (ウルタル氷河) から南稜上部へ | 7,020mまで    |
| 1991年 | 神渡湖衆偵察         | ◎南東面 (グルピー氷河) 偵察     |             |
|       |                | ◎南西面 (ウルタル氷河) 偵察     |             |
| "     | イギリス隊          | 南東面 (グルピー氷河) 東稜側稜    | 6,000m付近?まで |
|       |                | 南西稜 (ウルタル氷河) から南稜上部へ | 6,500mまで    |
| "     | ウータンクラブ        | 南西稜 (ウルタル氷河) から南稜上部へ | 6,500mまで    |



概念図：ウルタル各面のルート

- ① '86 神渡湖衆 北面グルキン氷河
- ② '92 神渡湖衆 サラットよりグルピー氷河へのルートを探して偵察
- ③ '91, '94 イギリス 東稜側壁
- ④ '91 神渡湖衆 偵察, '92 神渡湖衆 南東ピラー
- ⑤ '94, '96 カトマンズクラブ 南稜から登頂
- ⑥ '86 神渡湖衆 南稜左稜
- ⑦ '90, '91 ウータンクラブ 南西稜から南稜  
'91 イギリス  
'96 JAC東海 南西稜から南稜登頂
- ⑧ '93 ノルウェー 南西面から南稜

1992年 神渡湖衆： ◎サラット村からグルピー氷河へのアプローチ偵察

◎南東面（グルピー氷河）南東ピラー 5,400mまで

1993年 ノルウェー隊： 南西面（ウルタル氷河）から南稜中間部へ 6,000mまで

## 1. 登山記録

- 1994年 カトマンズクラブ隊：◎南稜（タルムシュ氷河） 6,500mまで  
" イギリス隊： 南東面（グルピー氷河）東稜側稜 5,800mまで  
南東面（グルピー氷河）東稜支峰側稜 6,000mまで  
1996年 JAC東海隊： 南西稜（ウルタル氷河）から南稜上部へ 初登頂  
" カトマンズクラブ隊：◎南稜（タルムシュ氷河） 登頂  
" 韓国隊： 南稜（タルムシュ氷河） ?  
" ウータンクラブ： 南西稜（ウルタル氷河）から南稜上部へ  
（?1990年以前 スイス隊： 南東面（グルピー氷河右岸）?）

ウルタル2峰はトレッキングのオープンエリアでアプローチも短いことから、ディラン同様上記以外にも無許可で数隊入山しているようだが、明確ではない。ウルタル2峰を形容する言葉としてよく「多数の隊の挑戦を退けてきた難峰」が使われるが、その「多数の隊」の中身は実は複数回登頂を試みているある程度の数の隊であるのが面白い。94年のイギリス隊のジュリアン・アトウッド氏、クラッグ・ジョーンズ氏も91年に続き二度目であった。しつこい性格の人間に目をつけられるようなたちの山なのだろう。

以下に各面のルートを私の山行をまじえて述べる。

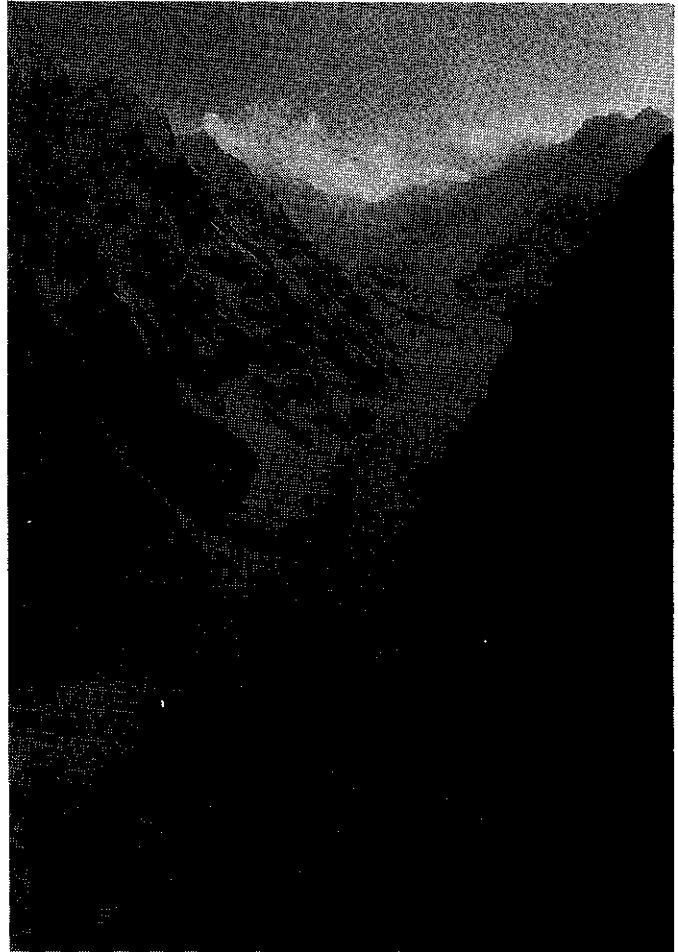
### (2) 北面（グルキン氷河／グルミット氷河）

北面にはウルタル2峰東稜に接する比較的短いグルミット氷河とそのさらに北隣りから大きく2峰、1峰を源頭とするグルキン氷河とがあるが、どちらも下部からアイスフォール帯となっており、通過にはアルミ梯子なしでは大変な労力となる。小さいグルミット氷河はグルキン氷河より一段高くなっており、こちらのほうが様相はさらに悪く氷河探検を目的とでもしない限り、ここへ行く人間はいないと思われる。2峰の北面は顕著な尾根もない大きな雪氷壁で、雪がべったりとついた中、あちこちに懸垂氷河がぶら下がり、たまにそれらのうちのどれかが大雪崩となって崩れてくる。雪崩の後の磨かれた適度な傾斜の雪面はスピーディーに登れそうだが、ここはいわば「ロシアンルーレット」のルートである。

私はイスラマバード勤務中に偶然会った86年の神渡湖衆隊に入れてもらい、グルキン氷河左岸3,100mのベースキャンプに6月始めに本隊より1週間程遅れて入った。アルミ梯子の多用でアイスフォール帯を一段は越え、中段の野球場のような広い氷河盆地4,200mにC1を設営した。そこから一段奥のアイスフォール帯はさらに悪く、また奥へ行けば行くほど懸垂氷河からの雪崩の危険があるので、そこから南に折れ、比較的安全そうなグルミット氷河源頭方向へと一段上がるルートを予定して寝た深夜であった。雪崩の爆風によってC1のテントはポールが弾け飛び、登山靴、ピッケル、アルミ梯子まで跡形もなく飛ばされてしまった。しかも音から察するにこの雪崩はウルタル東稜北面の側壁遥か上方からグルミット氷河を越え、中間尾根を越えグルキン氷河野球場まで

達したものであった。これで隊は一旦BCへと下り南稜へとルート変更を決定、人の靴を借りて再び上部の荷物を撤収に向かった私はクレバスに転落して骨折というおまけをつけ、皆にグルキン村まで担ぎ下ろしてもらい車で搬送してもらった。しかし恐怖はイスラマバードに着いてからも続くのだが、登攀ルートとは無関係の医療面のことであるので省く。

北面はいわば「下部は落とし穴付き迷路、上部はロシアンルーレット」であるが、この面からの可能性としては雪崩の周期をある程度読んで、2日位で一気に駆け上がるか、あまり氷河をつめずに比較的懸垂氷河の少ない東稜末端近くの側壁を上がってしまい、延々と東稜を辿るしかなく、どちらにしてもその前に2つの荒れた氷河を越えねばならないわけで、決して楽しめるルートではない。私は選ばない。



北面グルキン氷河 中段が4,200mの「野球場」  
左の尾根の向こうがグルミット氷河でウルタル  
はさらにその奥



86年神渡湖衆隊BC：グルキン氷河左岸3,100m

アプローチ：カラコルムハイウェイ沿いのグルミット村からグルキン村を経てグルキン氷河を渡る。  
ローポーター3日行程分（1日で十分着く距離）

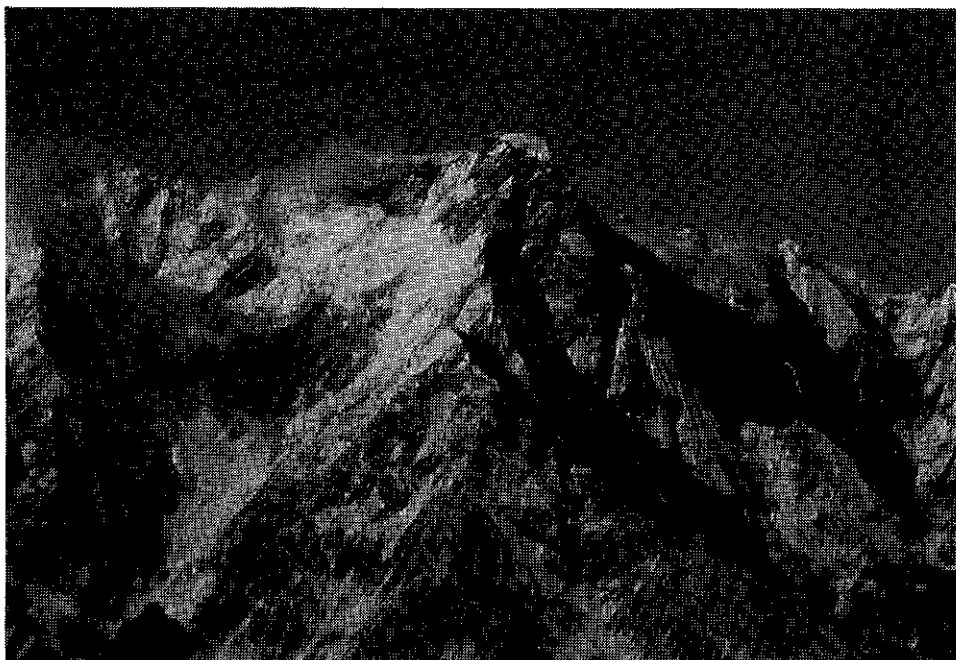
### (3) 南東面（グルピー氷河）

カラコルムハイウェイを中国方向に向かい、カリマバードを横に見てガネッシュを過ぎフンザ川を左岸に渡ってやや遡った辺りから、ウルタル2峰を南東面の麓に切れ込んだグルピー谷のすき間から見ると、北面から見える雪氷の塊のようなどっしりした形状やカリマバードからの台地状の頂

1. 登山記録



ウルタル 2 峰南東面 中央が南東ピラー左が南稜，右東稜の壁をイギリス隊は登った。



右下に伸びる小ピークをつけたリッジが南西ピラー  
手前に伸びるのが南稜 ディラン6,400mよりウルタル南面

## 1. 登山記録

稜とはうって変わって、てっぺんにだけ白い氷の庇を付けた巨大な黒い岩塔が天に突き出しているのに圧倒される。突き立った上部だけしか見えないので、尚のことこの威容には迫力があり、登攀意欲をかきたてられる。タワーの左のスカイラインが南稜のヘッドウォール、右のスカイラインが南東ピラーである。南東面はこの南東ピラーを中心に左に南稜、右に東稜の二つの長い稜線を翼のように広げ、グルピー氷河を囲んでいる。私は89年にディランの頂上付近からウルタルを見たときにこの南東ピラーの美しさに目をひかれた。2峰頂上からダイレクトに岩稜が下り、途中雪の付いたナイフエッジの小さな鋭いピークを中間部に從えてまたその下は岩稜となってグルピー氷河へとまっすぐ伸びている。とその時は遠目に見えたのだが、近くでみると南東ピラーは実は鋭い雪のピーク（パリザートピーク・仮称）を頂点とする下半分と上半分の岩稜帯とは繋がっておらず、ややずれていることがわかった。ピラーは4,200m位から下部岩稜が始まりこのピークに突き上げ一旦唯一の平らな場所となる雪のコルに下りる。その後は上部がオーバーハンギの岩壁となった雪壁に吸収され消えてしまう。頂上へと続くピラーの上部岩稜はその100m～200m右から上へと始まっている。この右の岩稜へのトラバースが大変悪そうである。いっそピラーの左の側壁のミックスマスを巻きぎみに登ってピラー上部へ出たほうがいいかもしれないなどと92年にこのルートを狙ってやってきたときには堤氏と毎日真剣に悩んでいたが、何のことはない、とてもそこまで届かず我々の夏は終わってしまったのだった。南東ピラー下部のパリザートピークの下は岩稜は写真で見えるほどすっきりしたリッジではなく、もろい岩のぎざぎざのリッジが続き、とてもリッジ通しには行けない。左右の側壁は時々ずっと上部の懸垂氷河の崩壊による雪崩で洗われる。当然最も速いピラー中央部に切れ込むルンゼをルートにしたわけだが、ここは9:30を過ぎると上の小ピークに付いていた雪がじょうごの先であるこのルンゼを定期便となって通過していく。空から降ってくるような急角度から岩まじりで落ちて来る特急便は通路がほぼ決まっているとはいえ、上に行くにも下へ降りるにもそこを2度は渡らねばならない身にとっては十分な脅威である。まして上部が雪雲の中にあるときなどは夜中であろうととても通れたものではない。上部も完全に晴れ、新雪がある程度落ちるまで丸一日BCで待って、その後行動開始、朝の9:30には安全地帯に来ていなければならない。雪となった場合、ピラーに取りついた後は中間部の雪のコルまでは安全なキャンプ地となるような場所もほとんどなく、行動中に雪がちらついてくると熱くなったエイト環を雪で冷やしながらアプザイレンで駆け下りた。こんな状況でBCでの天気待ちが多く、行動日数はわずか12日で時間切れとなったのが、成田、堤両氏と3人で向かった「最も美しいルート」の登攀であった。結局ルンゼを上部で左に入り、オーバーハンギの壁を越えてパリザートピークの左の側壁に出たところ(4,800m)をC1とし、そのまま側壁の岩と雪のコンタクトラインを“安全なコル”に向かって5,400mまで行ったところが最高到達点となった。

南東面でこの南東ピラーの他に可能性のありそうなのは、東稜の側壁に登り東稜上部を辿って頂

## 1. 登山記録

上へと達するルートである。91年に我々が南東面の偵察から帰った後、イギリス隊の内の2人は南東面へ入った。まず南東ピラーを試みたそうだが、1日でオーバーハングの壁の下まで行ってあきらめ、次に彼等が向かったのが東稜側壁である。この横長の屏風を立てたような側壁も北面ほどではないが7,000mの稜線直下からの懸垂氷河の崩壊が轟音を響かせている地帯である。運よく1,000m程セラック帯を登って側壁基部にたどり着ければ500mほどの岩壁登攀が出来る。ここはいわゆる壁やの世界である。壁の終了点からは雪稜または雪壁を東稜へとラッセルし、7,000m弱で東稜に出たあと比較的なだらかな雪稜を頂上へと向かい、頂上直下で急な雪壁を登れば“あがり”というルートに見える。が、何よりも壁の取り付けまでの雪崩が怖い。東稜の東端に行く程安全であるが、当然山頂はかなたへと遠ざかる。イギリス隊の2人はアルパインスタイルでこの壁を登り切り、6,000mまで行ったようであるが、そこまですな。南西稜に向かった他の2人も登頂できず、そこで『解が見つからない』となったわけである。ここで彼等のすごいところはあくまでもアルパインスタイルにこだわっていることである。イギリス隊は94年にもこの面を試みているが91年の最高到達点にまでも届かなかったようだ。

南東ピラーは誰も魅せられるルートであるが、下半部はどこをルートにとればいいのか、私も「解」を見い出せないでいる。取りついてから悪天となった際、こもってやり過ごす場所もなければ、雪崩の大きな危険にさらされ退却もままならないのでは唸ってしまう。上半部のリッジに出れば技術的には多少困難さがありそうだが道は開ける。我々は92年に南東面を試みるまでは、2峰はどこからでも下部は固定ロープを使い上部はラッシュタックティックスなどと考えていたが、この時からルートは南稜、ほぼ全ルートにロープを固定する以外に（私の力では）登頂そして無事下山はないという考えに変わった。



92年神渡湖衆隊BC：グルビー氷河左岸4,000m

アプローチ：フンザ川沿いのアハマダバード村よりグルビー集落を経て左岸の尾根に取りつき、シュクムシュンのコル4,200mまで放牧用の小径がある。途中放牧用夏小屋あり。ここまでロープーター3日行程分。ここからガレ場を4,500mのコル目指し、その後残雪とガレの上下を繰り返して、支尾根をいくつか越えメドウへと下る。ここは快適なベースとなるが、ここから支氷河舌端の水流脇をグルビー氷河へと30分下り、氷河に下り立ったところのほうが無駄がない。1日行程分としては長いがここからシュクムシュンから1日で往復したほうがよい。ポーター通過には7月末で雪の急斜面にロープ数ピッチ固定、ピッケルで足場を切る必要あり。6月のキャラバンは残雪で相当難しくなると思われる。

91年の偵察でこのベースへのルートは悪すぎると判断し、92年にはカラコルムハイウェイ沿いにアハマダバードよりさらに奥にあるサラット村からグルビー氷河への登路を探しに行ったが、その

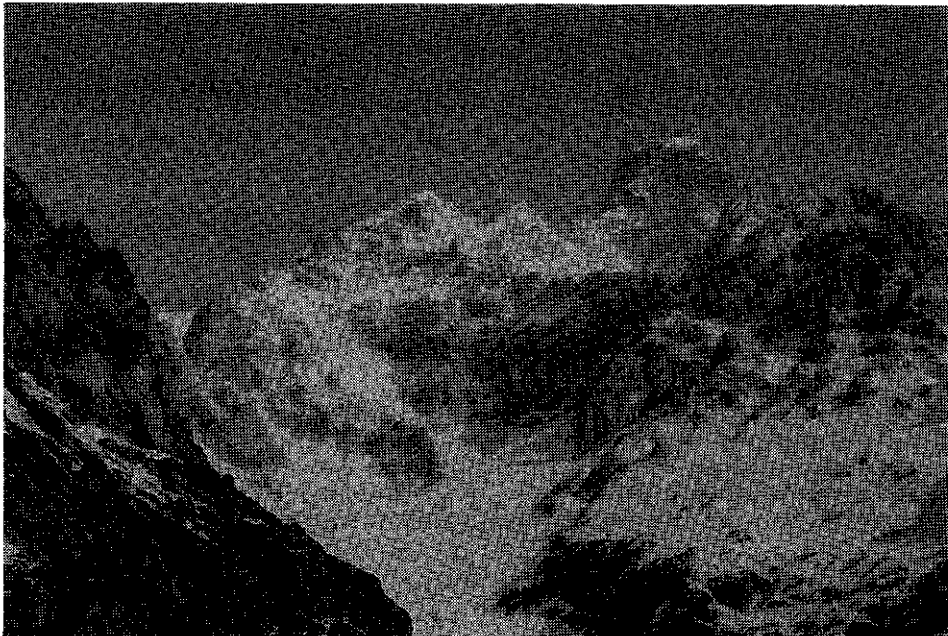
## 1. 登山記録

奥4,300m程のコルの向こうはグルミット方面に下りる谷であり、結局キャラバシの際はシュクム  
シュン経由のルートからグルピー氷河へと下りた。但し、このサラットの上部の谷は5,000m弱の  
岩峰に囲まれた放牧地であり、ここをベースにちょっとした岩登りがしばらく楽しめそうなところ  
である。(サラットから1日、トレッカー皆無、放牧小屋有)

6月でもグルピー氷河に割とたやすく入れそうなルートは、南面タルムシュナラ谷(南面参照)  
3,900m付近から南稜右稜末端付近のコルを越えてグルピー氷河右岸へ下りるといふもので、7月  
には山羊や牛の放牧路となりそうなところである。但し記録はない。

### (4) 南稜(タルムシュ氷河・仮称)

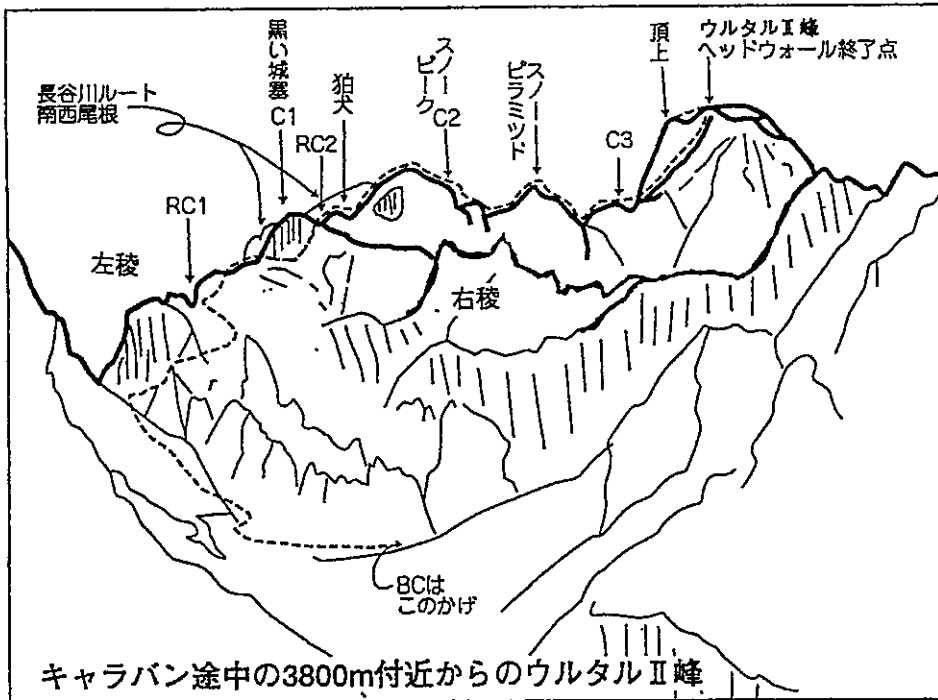
絵葉書にもなっているが、カリマバードからウルタル氷河を囲んだ1峰2峰を見ると、右の方の  
余り判然としない2峰の頂上からカリマバードの東隣り、アルティット村に伸びている右手のスカ  
イラインが南稜である。カリマバード、アリアバード方面から見上げると、この南稜は頂上直下が  
ヘッドウォール、中間部が割となだらかな雪稜、下部が小ピークの多い岩稜と見え、実際の中間部  
のピナクル群のギザギザの稜線はスノーピークの陰となって全く見えない。下部は顕著な尖った三  
角形の岩塔(狛犬)の少し下、5,800mのジャンクションピークで右稜と左稜とに分かれるが、これ  
もカリマバード側からは分かりにくい。南稜末端のアルティット村からみると今度は近すぎて頂上  
はもとより、ジャンクションピーク(黒い城塞)さえ見えず、右稜と左稜の茶色い末端しか見えな  
いが、この間に細く微かに切れ込んでいるのがタルムシュナラ(谷)、その奥に下からは想像できな



タルムシュ谷からウルタル南面



1. 登山記録



広い谷があり、ジャンクションピークの直下まで遡ると氷河となっているのである。この氷河を挟む右稜左稜はともに小ピークが林立し、岩も大変もろい。94年、96年はこの氷河上4,800mをBCとし、左稜へのルンゼから取りついた。フンザ川を挟んで対岸のナガールのホップルまで行くとこの辺が良く見えるが、南稜は正面に伸びてきているので距離感がつかめず、また中間部のピナクル群はやはり陰となっている。南稜中間部のギザギザが最も良く見えるのは南東面グルビー氷河側からである。

南稜のルートは大きく4つに分けることが出来る。

- 1) BC (4,800m) から黒い城塞の頭  
(左稜右稜のジャンクションピーク)  
(5,800m)

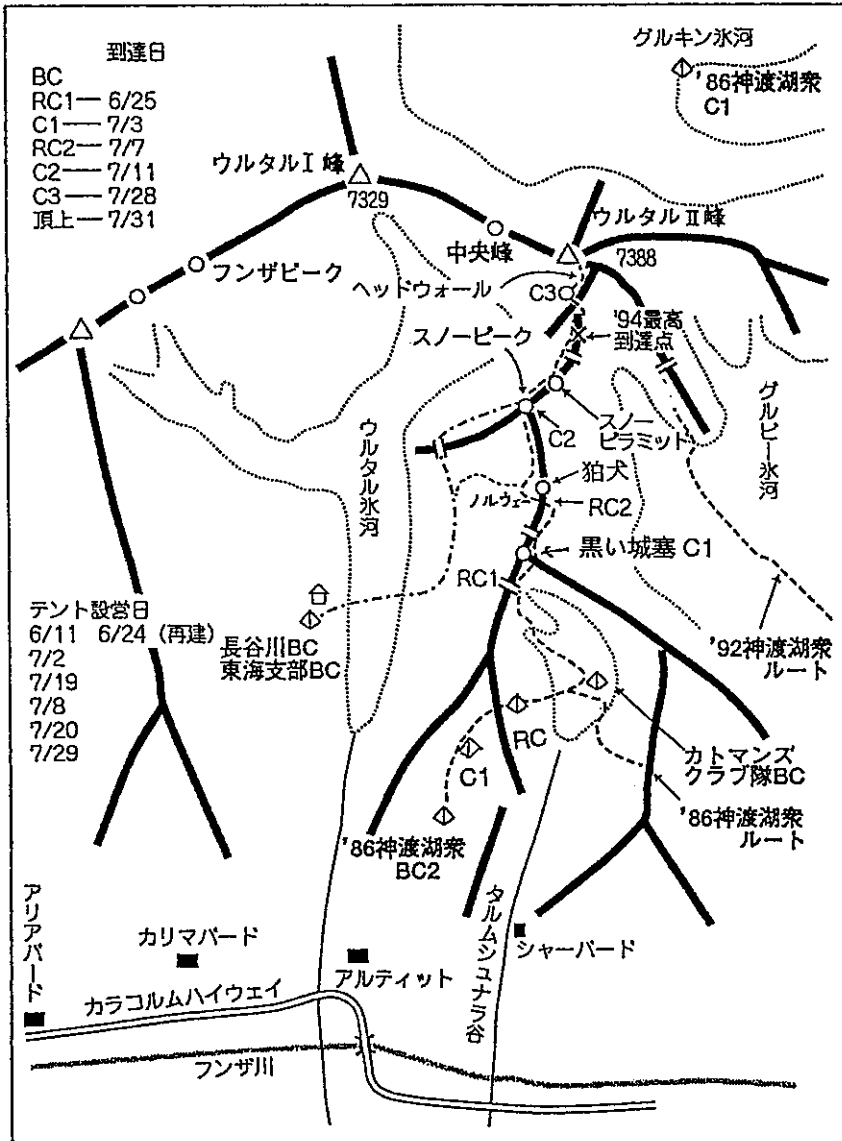
南稜カトマンズクラブルート  
キャンプ位置とピッチ数

BC	4,800m	タルムシュナラ氷河上
雪面	800m+30ピッチ	
RC1(リレーキャンプ1)	5,580m	南稜に上がった地点
	18ピッチ	
C1(キャンプ1)	5,830m	黒い城塞の頭
	9ピッチ	[BCから見える一番高いピーク]
RC1(リレーキャンプ2)	5,940m	狛犬ピークの足元
	31ピッチ	
C2	6,310m	スノーピーク
	33ピッチ+雪稜50m	(長谷川ルートとの合流点)
C3	6,700m	ヘッドウォール手前の稜線上
	5ピッチ	
ヘッドウォール基部	6,800m	
	11ピッチ	
ヘッドウォール終了点	7,250m	頂上雪田の一端
		水平距離にして500m位?
頂上	7,388m	

ピッチ数合計：133  
(50mロープ1本分を1ピッチに数えた)

1. 登山記録

- 2) 黒い城塞の頭からスノーピーク (南西稜との合流点) (6,300m)
- 3) スノーピークからヘッドウォール手前6,700m
- 4) ヘッドウォール (7,200m?まで) と頂稜雪田



ウルタル南稜ルート図

BCから黒い城塞の頭までは晴天時の気温の上昇から最も落石の多いところで、94年は何度か固定ロープを切られ夜中から明け方の行動を常としたが、96年は夏の到来の遅れで氷のコーティングが溶けず、ルート上はほとんど落石はなく決して危険ではなかった。BCからのルートは雪が安定し

## 1. 登山記録

ていれば、夜中のうちに黒い城塞直下へと伸びるルンゼ状の雪面を駆け上がるのが一番速いと思われるが、ここは96年でさえ降雪時や昼は必ず雪崩と落石の通り道となっていた。我々がとったルートはさらに左手前の大きなルンゼから左稜のバットレスを登り、このルンゼ状雪面をつめた部分へ出るもので、ここをリレーキャンプ1とした。(このすぐ上に古い残置ピトンがあり、ずっと以前にルンゼ状雪面を通りここまでだれかが来た形跡があったが、おそらく85年のポーランド隊と思われる。) その上に立ちはだかる黒い城塞は最難関の一つで、もろい岩壁そしてミックス壁と氷のトラバースが主で94年は落石も多かった。が、ここも96年は雪が多くずっと楽に登れた。黒い城塞の頭は我々のC1である。

黒い城塞の頭からスノーピークまでは小ピークがいくつもある稜線上を主にウルタル氷河側に巻きながら、94年は岩と氷のトラバースだった。ルートファインディングの難しいところで、何度も行きつ戻りつし時間のかかったところだが、96年は多くが雪のルートとなっており、ハイポーターもスノーピークのC2まで来てくれた。94年に氷の上に乗った新雪がよく雪崩れていた「狛犬ピーク」手前の斜面のトラバースも今回はまだ氷が出ておらず、ほとんど雪崩の心配はなかった。南稜上最大の岩塔「狛犬」はどちらかを巻かねばならないが、我々はウルタル側を2ピッチ半アプザイレンで下り、ぐずぐずの岩場をトラバースして次のクローアールに出たところで稜線へ登り返すルートをとった。94年はこのクローアールにアプザイレン用の支点のシュリング(青いケブラー)が残っており、これは93年に南西面ウータンクラブルートから分かれて上がってきたノルウェー隊のものと思われる。同隊は南稜に上がって少し登った地点(6,000m弱)で引き返したようだ。南稜に上がっても次々と岩が出てきてスムーズに稜線上を行けず、登ってはアプザイレンで戻り、氷と岩の嫌らしいトラバースで巻いていくというこのルートが嫌になったであろうことはよく理解できる。自分達の登攀具節約のため、前年のウータンクラブの残置ロープを持って来て支点に使って下りたのであろう。94年の最も嫌らしいピッチはここにあった。やがて氷壁を登り、スノーピーク直前で突然だだっ広い斜面のラッセルをして雪のピークに着くと、やっとウルタル2峰の頂上とヘッドウォールが見える。しかし中間部で我々を待っている長い上下左右ギザギザの稜線はスノーピラミッドの陰となってここからは全く見えない。(ウルタル氷河側の下からみても見えない。) ここまで来るとヘッドウォールまですぐであると錯覚する地点である。94年は氷を削ってC2のテントを張ったが、96年は膝上まで潜る深雪だった。ここで左からウータンクラブ、JAC東海等がルートとした南西支稜が合わさる。

スノーピークから先はしばらくほとんど標高は稼げない。スノーピラミッドの氷の斜面の大トラバースの後、はじめてその先に続くギザギザ稜線を目のあたりにし、南西面からしか南稜を見ていなかった者はこれから越えねばならない瘦せた小ピークの多さに落胆する。ここで南東面から南稜を見ていた者との差がつくのだが、知っていてもやはり嫌なものだ。ここから小ピナクルの連続で

## 1. 登山記録

神経を使う。グルピー氷河側は庇状に突き出したスカスカの蜘蛛の巣氷なので全てウルタル氷河側のミックス壁を使うが、日影の氷は硬く日向の岩は所々もろい。これらの中の「ダイヤモンド状ピナクル」の基部が94年固定ロープが切れて黒川溶三郎君が転落した事故現場である。が、この辺も例に漏れず96年は比較的安定した雪が付いており、岩のピッチ以外はスムーズに抜けた。大きな雪のコルを過ぎるとやっと南稜は登りにかかり、94年の最高到達点である。94年はここから事故現場に急遽戻ったため、ここには登攀具やロープ、スコップまでデポしたままだったので2年ぶりの対面である。この上が南稜では珍しく広い雪面となっており、その先は岩場を巻いてグルピー側、ウルタル側ともに登れる。94年はこの辺の雪の状態が大変よく、「氷になりかけの固い雪」だったため、予定としてはここから南稜上を辿らず、ウルタル氷河側のヘッドウォール基部を西に広くバンド状に伸びる雪田を固定ロープを張らずに大トラバースし、頂上を下を過ぎてヘッドウォールの左端にある雪氷のクローアールを登って頂上稜線へと抜け、頂上まで折り返すというルートを考えていた。これは距離はあるがルート工作の時間がほとんどいらないし、ロープが不足していた我々には最適と思われた。96年は雪が深く基部トラバースは全く合理的ではなかった。ロープも十分あったし、またメンバーも皆岩場に燃えていたのでヘッドウォールに向かって稜線を進む。6,700m付近をC3とするが、氷を削って2、3人用テント1張が精一杯なため、もう1張は50mほど離れた少々稜線から下ったところに張る。

ヘッドウォールに入るとウルタル氷河側の側面を南稜リッジから付かず離れずでミックスの3級程度の岩登りとなる。たまにあの冬壁でもっとも嫌らしい「4級プラス」が出てきて、トップは精神的に辛い。セカンドはロープ、登攀具の重さで辛い。長谷川さんらが上部でビバークをしたと思われる「長谷川雪田」は膝まで潜り、体力勝負となる。この上7,000mを超えた数ピッチが、本当に岩場らしく真上に向かって登れるところで、特に最後の2ピッチは特筆に値する。下のピッチは左上はオーバーハング、右はすっぱり切れ落ちたじょうごを半分にしたような壁をまず2m下り、じょうごの出口の穴をまたぐように向こうの壁に移り、雪の付いた立ったスラブをランニングビレイもとれずに登っていく。技術的には5級位だろうか。ここはトップの堤氏であればこそ当然の如く登ったが、私であれば一本立てて気持ちを整えてからでなければとでもとりかかる気のしないところである。(下りはずっと左上のツルツルのジェードルをアプザイレンした。)最後の1ピッチは傾斜もあるがホールドもそこそこある4級程度の50mいっぱいのフェースで、ヘッドウォールから頂上稜線に抜けるにふさわしい気持ちのよいピッチである。終了点からはやや傾斜のある雪田をすねまで潜りながら、感傷に浸りながらも一步一步すすめば広い頂上である。



86年神渡湖衆隊BC：南稜左稜末端4,100m

アプローチ：アルティットからトラクターでドゥイカルの上まで上がり、そこからロープター2

## 1. 登山記録

日行程分を1日で上がる。



94年、96年カトマンズクラブ隊BC：タルムシュ氷河上4,800m

アプローチ：アルティット上部のシャーバードまでトラクターで上がり、そこからタルムシュナラ（谷）沿いにシャミールハライ（3,800m）、バードゥバコール（4,000m）とローポーター2日行程（1日でも着く）。ここからはBCまで往復1日行程で雪とモレーン上を登る。この間ローポーターの泊まり場はすべて放牧用岩小屋のあるシャミールハライ。



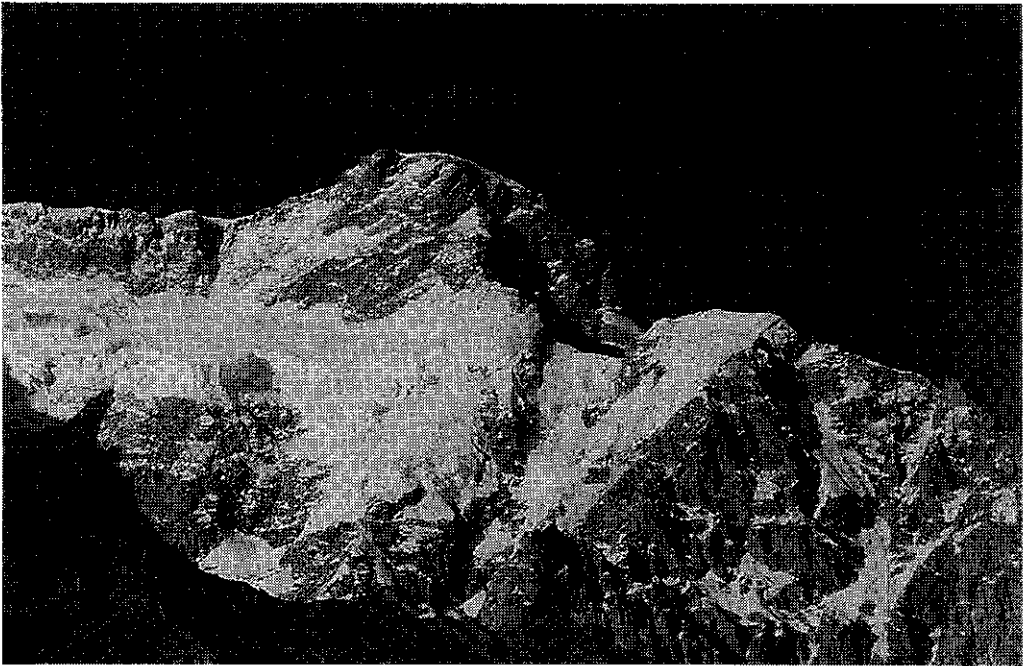
86年の神渡湖衆隊は南稜左稜の本当の末端にベースを置き、左稜沿いに5,000mの岩峰を越えたコルをC2（RC）とし、そこから右稜との間のこのタルムシュ氷河に下りてから数ルート試みている。私は92年の南東ピラーの後、成田氏、堤氏との検討の結果このタルムシュ氷河上にベースを置き南稜を登りたいと思い、94年に来た時には成田氏のアドバイスに従い、左稜5,000mのピーク越えて下りてくるのではなく、この氷河へ谷沿いに下から上がってくるアプローチルートをまず偵察に行った。シャーバードまでジープで上がりこの谷の下部入り口を見た時は、てっきり谷を一つ間違えてしまったと思ったほど谷幅があまりに狭くまた水量も少なかったが、登るに従い次第に開けてきて気持ちのよい谷となり、ついに氷河が見えた。4,000mのバードバコールまでは6月からは放牧地となるためいい道が続く所であるが、96年の6月中旬は悪天続きで我々がBCから一時下りてくると、この辺まで時ならぬ雪で、放牧の山羊が何頭も凍死していた。

### (5) 南西面（ウルタル氷河）

ウルタル1峰、2峰に加え、フンザピークやレディースフィンガーなどの岩峰と7,000mの稜線直下にかかる巨大な懸垂氷河、その下の雪崩で磨かれた巨大な岩壁がぐるりを囲むウルタル氷河があるのが南西面である。氷河の中間部右岸に、周りの厳しい景色とは対照的になだらかな緑の放牧地が広がっている。放牧小屋が1軒、最近では茶屋も1軒出来たという3,400mのこのアルパインメドウが南西面のベースとなる。2峰頂上方面は1峰同様懸垂氷河が時々大音響とともに崩れて来てルートにはとてもならない。南稜の途中に上がるしかないが、この地点からでは真下過ぎて、南稜上部唯一の支稜である南西稜も切り立った岩壁の面しかみえない。そこでウルタル氷河を挟んで向かい側の尾根を4,000m位まで登ると南西稜上部がよく見えてくる。南西稜は南稜のスノーピーク（6,300m）に突き上げており、上部は雪で覆われている。但し、その雪氷面の末端はセラックとなっており、30～40mのかぶりぎみの氷の段差を越えなくてはならない。私は91年の偵察時にこれを見てセラックの崩壊の恐怖を感じた。その後10月に長谷川氏、星野氏がこのルートで雪崩でなくなったと聞いたとき、すぐこのセラックの崩壊かと思ったが実はもっと下のルンゼの中の新雪雪崩であった。セラックの崩壊もたまにあるようである。南西稜の下部はちょっと見ただけではわかり

## 1. 登山記録

にくい。支稜末端の小岩峰の陰となって見えないのである。このルートについてはウータンクラブ隊の報告書とJAC東海隊松岡氏の報告に詳しいと思うが、私はとにかくここにラインを引いた長谷川氏の目のつけどころに感嘆し、それをワンプッシュで初登頂したJAC東海隊の山崎氏、松岡氏の力量と気概に脱帽するのである。私は89年にフンザ川対岸のディランから撮った写真で検討しており、90年のウータンクラブの報告書を見ていたからこそこの南西面偵察時にルートをある程度目で追えたものの、それでも南西稜コルに上がる隠れたルンゼはわからなかったし、それどころかベースから4,500mあたりまで続くという山羊の放牧用の道などはその直後にイスラマバードで会った星野氏に教えてもらうまで全く考えてもみなかった。村の裏山にはいろいろ仕掛けがあるものである。この南西稜も落石が大変多いようである。



ウルタル2峰南西面 右稜線上の雪のピークがスノーピーク  
この陰、コルまでの間に数多くのピナクルがある

南西面にはもう一つ、93年にノルウェー隊が採った南稜上「狛犬」に出るルートがある。南西稜へと取りつく4,500m付近から南西稜コルへのルンゼへ入らず、右上して南稜側壁を登り、スノーピークよりずっと下の「狛犬」の上で南稜に出るものだ。落石が一段と多そうな雪氷壁なので当然アルパインスタイルで目指すことになるのだが、それにしては南稜に出てから先が長すぎるのではないかと思われる。しかし南西面で私の想像を超えたクライミングがJAC東海隊によってなされた今、私の感想は的を得ていないかもしれない。

## 1. 登山記録

南西面BC：ウルタル氷河右岸3,400m 放牧小屋下

アプローチ：カリマバードからローポーター日帰り行程。大変環境のよいところで、ウルタルBCの中ではもっともくつろげる。BCから日帰り野菜の買い出しにも行ける。このすぐ上辺りはたまに大雪崩の爆風が襲うことがあるようだ。BCまでも風は来る。

## 3. 1996年の南稜からの登頂

私は堤氏とともに94年、96年ともに南稜をルートに選んだが、それには以下のような理由があった。

- 1) この地域はバルトロの様に快晴の日が多くはないので、上部が雲の中であったり、下部まで多少雪がちらついていても下部では雪崩の心配なく十分行動出来るルート
- 2) 上部で悪天につかまっても雪崩の心配なく天候の回復を待てるテントサイトが得られるルート
- 3) 落石、雪崩の少ないルート
- 4) まだ誰も本格的に手をつけていないルート
- 5) 全員登頂するルート

これらの点を優先すると南稜しか考えられず、そこから86年の南稜末端のBCでは遠すぎることに、南稜は距離が長くまた途中にいくつもの岩峰を越えなければならないこと、登頂したとしても下降はスタカートの登り返しやトラバースが多く入り、下降にも登りに近い時間がかかること等への対策を打った結果が、BCを4,800mという高所に置き、固定ロープを多用する登り方となった。尚、堤氏がメンバーであったことから登攀技術面で厳しい未知のルートではあったが選べた。

この地域は比較的天気が悪いので、対処としては次のようにした。ディランの時同様、最終段階に入るまでは悪天時にはBCへ下り、体力の消耗と高所食の消費を避ける。高所待機はしない。BC食は現地調達を中心に25日分強、高所食は日本からのものを中心に予備を入れて25日分。村への買い出しが可能な地域なので天候等の理由でこれより長期となってもBC用食料、燃料はいくらでも追加できる。また、ポーラーメソッドではよく3日動いたら1日休みなどということを知りながら、これでは貴重な好天日を無駄にする可能性が大きいので、行動できる天気である限り全員何日でも行動（ポーターは3日を限度とする）、悪天日は何日でもBC停滞休養。但し、過労で動けなくなる前に自己申請で休むこと。これで最終段階では7日連続12～16時間行動となってしまったが、そうしなければルートの状態の良い7月中の登頂は無理だっただろう。8日目の8月1日には天気が崩れたのだから当たり前であった。

その他気をつけたことは、96年の登山期間は落石の少ない7月中登頂を目指したものとする。行動は落石、雪崩を避けるため夜中からとし、下半部では9：30ごろまで、上半部では状態をみて制限なしとする。ルート工作は暗い中では効率が悪いので、ちょうど明るくなりかけにすぐ始められるようにする。しかしそれまで行動しないのでは行動時間が短くなってしまいうため、前回工作終了点を常に宿泊地より数時間前進させておく。例えばC1入りする時の前回ルート工作終了点がC1の場合は、

## 1. 登山記録

朝5時頃にはC1に着くようにBCを出発し、C1で荷物を登攀具とロープに変え、さらに4～6時間ルート工作をしてC1に戻ってくる。これで翌日は暗いうちに出発出来、無駄がない。(提氏は暗い中でもルートを伸ばしていたが。)94年は固定用ロープが6,000mでも足りなかった上、固定ロープが切れての転落死が起きたので96年はナイロンの7mmを中心に8mmも多く入れて8,000m以上用意した。支点用のピトン等も当然増やし、荷上げが間に合うかどうかポイントとなっていたので、2名のハイポーターがスノーピークまで荷上げ出来るように、そこまでのルートはハイポーター用にしっかり整備した。ハイポーターはC2まで荷上げしてくれただけではなく、メンバーがいつもハイポーター以上に荷物を持っているのを知ってからは競って荷物を持ってくれるようになった。

他にもいろいろあるが、今回の全員登頂成功の主要因は以下の二つである。メンバー全員が強い登頂への意志を持ち続けられたこと、そして1986年からの前3回のウルタル登山の情報の蓄積を活用できたこと。これらはどちらも4回にわたる登山にあたって精神的にまた物理的に支えてくださった方々のご助力の上に立ってこそ得られたものであると深く感謝するところである。誌面を借りてお礼を申し上げたい。本当にありがとうございました。



カトマンズクラブ・ウルタル登山隊1996:

隊長 高橋 堅(37) 登攀隊長 堤 信夫(45) 隊員 安藤昌之(40) 斎藤 渉(39) 星野龍史(28)  
行動記録: 5月24日成田空港発, 6月8日シャーバードからキャラバンスタート, 11日BC予定地到着, 13日から8日間風雪, 20日アリアバードへ一旦下る, 24日BC再建, 同日深夜より登攀開始, 25日リレーキャンプ1(RC1)到達, その夜からまた悪天停滞, 7月2日行動再開RC1入り, 3日黒い城塞の頭(C1予定地)到達, 7日行動再開, RC2(狛犬の足元5,940m)建設, 11日スノーピーク(C2予定地)6,300m到達(JAC東海隊登頂を見る)後BCへ下山, 19日行動再開C1建設, 20日C2建設, 22日からBC停滞, 25日登頂へ向けて出発, 29日6,700mにC3建設, ヘッドウォールへ, 30日全ルート工作終了, 7月31日朝8時半全員登頂(最初にベースに着いてから50日目)後C3撤収C2まで下降, 8月1日C2, C1撤収BC着, 荷下げの後6日BC撤収アリアバード着

総工作ピッチ数: 50m×137

BC以上での滞在: 54日, BC以上での行動日数: 24日, RC1以上での宿泊日数: 16泊

(カトマンズクラブ・ウルタル登山隊1996隊長)